

本誌は3月号をもつて通刊50号を数えた。季刊で始まった本誌の創刊は平成5年（1993年）の5月だから、もうすぐ7年である。薄っぺらな雑誌をたったの50冊発行したに過ぎない。これだけの仕事しかしていないという思いがある反面で、我ながらよく続けてこれたものだなという感もある。それが可能であったのは、読者をはじめ広告主や株主の皆様、見合わぬ仕事で共に苦労をしてきた執筆者や社内外のスタッフの人々、有形無形のご支援をいただいた澤山の方々のお陰であると考えている。あらためて御礼を申し上げる。

江刺の稻

「江刺の稻」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稻。全く管理されていないこの稻が、手をかけて育てた畦の内側の稻より立派な成長を見せている。「江刺の稻」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

第49回 本誌編集長 昆吉則

創刊50号、ありがとうございます

に読者が増えていった。広告も増えた。それは嬉しかったし、有難いことだった。

れている農業関連業界が新たな活路を見出すのももう少し容易であつたろう。今さら言つても始まらない。

しかし、昨年の後半位から農業の川上・川下を問わず関連業界人たちの振る舞いがようやく変わってきたようと思える。さるに今年に入つてからは、何処で聞いたか様々な業界人たちが本誌を訪ねてきて、変化を予感させる動きを語る。僕も「やつ」という思いに好感じているところだ。

そんなこともあって今月の特集では、今からちょうど10年前に上梓された唯是康彦氏の『尊農開国』からタイトルを借用し、創刊50号にして改めての原点回帰、そしてマンネリと言われながらこの50号で言いつづけた、誇りある日本農業のありようを考えてみた。

さらには「月刊・農業経営者」という農業サービスのシステムが、さらに役立つ「農業経営情報コンビニエンス」となることを目指して、51号目から新たな情報サービスを始めることを案内(68・69頁)したい。

インターネットでのサービスも開始の予定であるが、それよりはるかに普及度が高く、数多くの方にご利用いただけるファックスを使う多目的な情報サービスである。そのサービス内容も順次拡充していく予定だ。新規のサービスにおいては、個別読者ごと

この時とはかりに高値で売る注
まい農民の姿が、50年ぶりに多く
の消費者に見抜かれていると
僕には思えた。にもかかわらず、
多くの農民はそれが商売であり
経営だと誤解しているようだつ
た。あるいは「虐げられてきた農
民だからそれも許される」など
と相変わらずの被害者意識を幅
る愚かな農業ジャーナリストと称
する輩もいた。

そんな農民は淘汰されていくだろう。ぬるま湯の中にいる日本農業は儲かるところでは改革されない。お題目ではない本当の危機感の中でしか健康な変化は起きないの

僕の選ぶべき道、問うべきテーマは、単にジャーナリストとして農業を語ることではなく、農業にかかわって飯を食う一人の商人として自らの存在を問うことだと考えてきた。この雑誌を発行することで自ら当事者としての振る舞いを考え、悩みうろたえつとも同伴者としての農業経営者とともに新たな道を見出そうとすることが必

始まつたのはあの大冷害の年だつた。冷害による米不足が明らかになると読者の申し込みが一気に増えた。当時は年に4回の発行であつたがその秋以来、発行の度